

看護学科における男女学生の情動知能特性の検討

平井 由佳・橋本 由里

概 要

本研究は、情動知能尺度EQS（エクス）を用いて、看護学生の情動知能特性を調べた。その結果、対象者全体の情動知能特性として、対人対応得点が高いという結果が得られた。また、ほぼ全ての項目で社会人平均値よりも高い結果が得られた。特に、「共感性」、「愛他心」、「対人コントロール」、「喜びの共感」、「悩みの共感」、「配慮」、「人づきあい」、「協力」、「気配り」の項目が高い傾向にあった。一方、「リーダーシップ」は社会人平均値とほぼ同じくらいであった。

性差の検討をしたところ、「人づきあい」、「適応性」について男性の方が女性よりも得点が高いことが明らかになった。

キーワード：情動知能, EQS, 看護学生, 男子看護学生, 性差

I. はじめに

近年、看護師を志す男性が増えてきており、我が校でも男子学生の入学数が増えてきている。一般に、男子学生は優しくて穏やかな印象を受け、女子学生が多い中でも他学生と協力して学校生活や実習などを送ることができているように見受けられる。一般に、男女を区別しない看護学生の性格傾向としては、“社交的”、“活動的”、“リーダーシップ”に優れていることが明らかになっている（近村ら, 2007）。また、橋本・宇津木（2010）は“看護学生は対人対応に優れている”と報告している。看護職においては、傷病を抱える患者やその家族の心理を理解し適切に対処するため、それらの人々への共感性が必要とされている（林・河合, 2001）。したがって、看護学生の高い対人対応能力は、将来看護職に就く上で望ましい資質だと考えられる。

現在は女性だけでなく男性の看護師も増えてきている。しかしながら、男子学生に特定した研究に関しては、実習上での特性について調べたものはあるが（荒川, 2007）（三宅ら, 2010）、場面が実習に限定されている。そこで看護師を目指している男子学生の特性はどのよ

うなものなのか、また、男女において特性に違いは見られるのかどうかを調べることは重要だと考えられる。本研究では、情動知能尺度EQS（エクス）を用いて、S大学の看護学生全体の情動知能特性を調査し、社会人一般の平均値を参照し、調査対象者の情動知能特性の傾向を明らかにする。そして性差の検討を行うことを目的とする。

II. 用語の定義

EQS (Emotional Intelligence Scale 以下EQS とする)：情動知能尺度

情動知能とは、「情動を知覚すること、思考を助けるために利用し作り出すこと、情動と情動の知識を理解すること、情緒的知的な成長を促すように情動を制御すること」である(Mayer & Salovey, 1997)。

EQSは、65の質問項目から成り、「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」の3つの領域で構成されている。これらの領域は、それぞれ、自己対応：「自己洞察」、「自己動機づけ」、「自己コントロール」、対人対応：「共感性」、「愛他心」、「対人コントロール」、状況対応：「状況洞察」、「リーダーシップ」、「状況コントロール」の対応因子から成っている。さらに、対応因子はそれぞれ、

自己洞察：「感情察知」，「自己効力」，自己動機づけ：「粘り」，「熱意」，自己コントロール：「自己決定」，「自制心」，「目標追求」，共感性：「喜びの共感」，「悲しみの共感」，愛他心：「配慮」，「自発的援助」，対人コントロール：「人材活用力」，「人づきあい」，「協力」の下位因子から構成されている。

Ⅲ. 研究方法

1. 時期

平成22年8月～平成22年10月 アンケート記入，回収

2. 対象

本研究の参加に同意を得られた，S大学短期大学部看護学科の1年生男女全員及び2年生の男子学生

3. 実施方法

調査対象者にEQSを施行させた。

まず，調査対象となる学生に対して，本調査が普段の自分の行動や考えに関するものであることを説明し，あらかじめ本調査へ参加することについて同意を得る。

測定は情動知能尺度EQS マニュアル（内山ら，2001）に基づき実施する。質問は65項目あり，調査用紙への記載に要する時間は約20分である。調査用紙は授業後に配布し，授業後および後日の締切日までに回収箱にて回収を行った。

回答方法は，EQSマニュアルに基づき，質問用紙の各項目を読み，自分にもっともよくあてはまると思う番号を各項目番号の右にある数字から1つ選んで○で囲ませた。「0まったくあてはまらない」「1. 少しあてはまる」「2. あてはまる」「3. よくあてはまる」「4. 非常によくあてはまる」の5件法である。

4. 分析方法

データについては，調査対象者個人が特定できないように，コード化するとともに，統計処理にあたっては，性別，年齢の要因のみを使用した。採点は，マニュアルに従い下位因子ごとに項目の合計得点を算出させた。次に，算出し

た下位因子得点を合計し，各対応因子得点を算出させた。最後に，対応因子得点を合計し，各領域得点を算出させた。次に，社会人一般の平均値を参照し，調査対象者の情動知能特性の傾向を知る。さらに調査対象者の性差の検討を行う。

統計処理にはPASW Statistics 18.0 for Windowsを用い，危険率 $p<.05$ を統計学的有意水準とした。

5. 倫理的配慮

対象者である学生に研究の趣旨，目的および調査方法を伝えた後，研究の参加は自由意思であり，結果は研究目的以外には使用しないこと，データは匿名化し，個人が特定されないようにすること，調査協力への可否は成績に影響しないこと，調査書記入の途中であっても参加を辞退することができることなどを文書および口頭で説明した。調査用紙の回答および提出をもって同意を得たとみなした。なお，本研究は，島根県立大学短期大学部の研究倫理審査委員会の承認を受けた上で実施した。

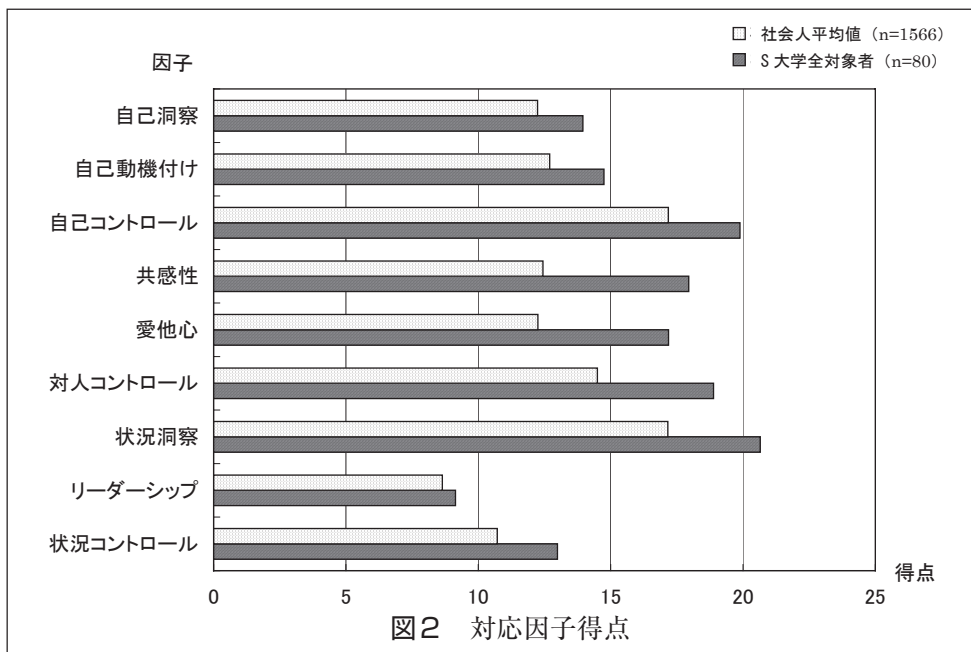
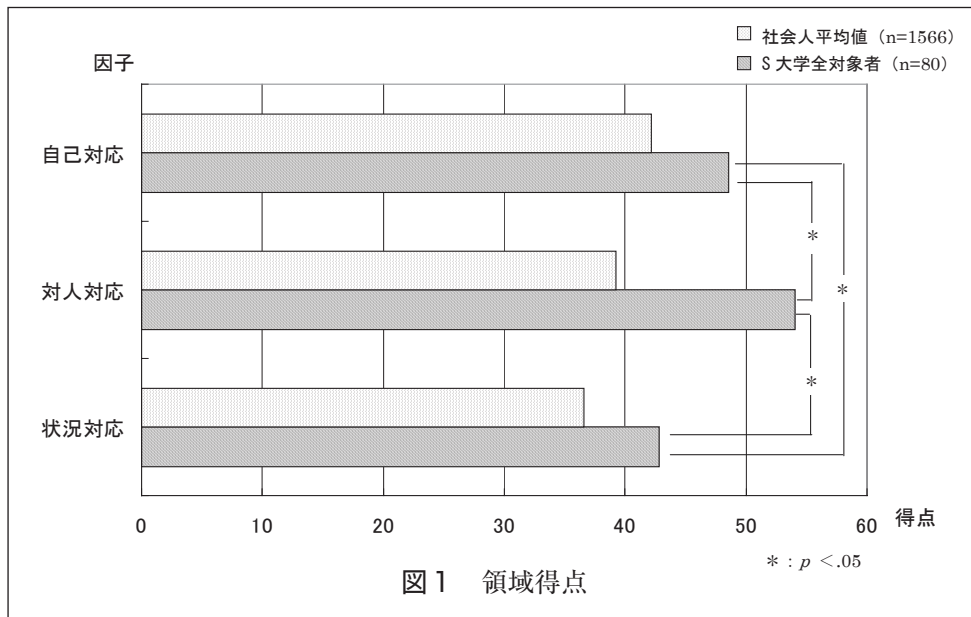
Ⅳ. 結果

90名（男性25名，女性65名）に配布し80名（男性16名，女性64名）から回収した。回収率は88.9%，有効回答率100%，平均年齢は18.8歳であった。

1. 領域得点からみる対象者の特性

領域得点を図1に示す。領域得点を従属変数として，反復測定1要因の分散分析を行った。その結果，領域得点の主効果が認められた($F(2, 158)=30.79, p<.01$)。多重比較の結果，自己対応得点と対人対応得点の間に有意差が認められた($p<.05$)。つまり，自己対応得点よりも対人対応得点が高かった。また，自己対応得点と状況対応得点の間に有意差が認められ($p<.05$)，状況対応得点よりも自己対応得点が高いことが示された。さらに，対人対応得点と状況対応得点の間にも有意差がみられた($p<.05$)。つまり，対人対応得点が状況対応得点よりも高かった。したがって，得点は対人対応得点，自己対応得

看護学科における男女学生の情動知能特性の検討



点、状況対応得点の順に高く、それぞれに有意差が認められた。

2. 対象者の情動知能特性

EQSの平均値については、大学生の標本数が少なく大学生平均値との比較が困難であるため、社会人平均値と比較した。その結果、全ての領域においてS大学の方が社会人よりも平均値が高かった。また、社会人平均値では自己対応得点は対人対応得点よりも高い(内山ら, 2001)が、本研究では、自己対応得点よりも対人対応得点の方が高かった(図1)。

次に、対応因子得点を図2に示す。対応因子

についても、全ての因子において社会人平均値よりも高いが、特に、「共感性」、「愛他心」、「対人コントロール」の得点が高いことがわかった。一方で、「リーダーシップ」においては、社会人平均値とほぼ同じくらいであった。

さらに、下位因子得点について、表1に示す。下位因子得点についても、「目標追求」以外の因子は社会人平均値に比べて高かった。特に、「喜びの共感」、「悩みの共感」、「配慮」、「自発的援助」、「人づきあい」、「協力」、「気配り」の項目の得点が高い傾向にあった。

表1 社会人平均値、全集団および男女別の下位因子得点の平均値

下位因子	社会人平均値 (n=1566)	全集団 (n=80)	男性 (n=16)	女性 (n=64)
感情察知	6.82±2.19	7.80	8.19	7.70
自己効力	5.43±2.19	6.15	6.69	6.02
粘り	6.45±2.36	7.36	8.00	7.20
熱意	6.25±2.30	7.39	8.25	7.17
自己決定	6.05±2.34	6.69	7.00	6.61
自制心	5.54±2.39	7.63	7.38	7.69
目標追求	5.60±2.25	5.58	6.25	5.41
喜びの共感	6.86±2.49	9.89	9.63	9.95
悩みの共感	5.59±2.29	8.06	8.25	8.02
配慮	6.76±2.50	8.76	8.63	8.80
自発的援助	5.50±2.32	8.43	8.00	8.53
人材活用	3.98±2.20	4.98	5.25	4.91
人づきあい	4.74±2.28	6.48	7.94	6.11
協力	5.79±2.18	7.44	8.06	7.28
決断	5.15±2.32	5.74	6.38	5.58
楽天主義	5.43±2.36	6.31	6.19	6.34
気配り	6.56±2.13	8.60	8.63	8.59
集団指導	3.67±2.50	4.14	4.06	4.16
危機管理	4.97±2.46	5.00	6.06	4.73
機転性	5.21±2.29	6.03	6.69	5.86
適応性	5.51±2.23	6.96	8.19	6.66

* : p<.05

3. 性差の検討

領域得点, 対応因子得点, 下位因子得点について性差があるかどうか調べるため, 対応のないt検定を行った。その結果, 領域得点については有意差が認められなかった(図3)。対応因子得点に関しては, 「状況コントロール」について有意傾向がみられた($t(78)=1.88$, $p=.064$)(図4)。下位因子得点の内, 「人づきあい」について有意差が認められた($t(78)=2.49$, $p<.05$)。つまり, 「人づきあい」の得点は男性の方が女性よりも高かった。また, 「危機管理」については有意傾向であった($t(78)=1.96$, $p=.053$)。さらに, 「適応性」については有意差

が認められ($t(78)=2.15$, $p<.05$), 男性の方が女性よりも得点が高いことが示された(表1)。

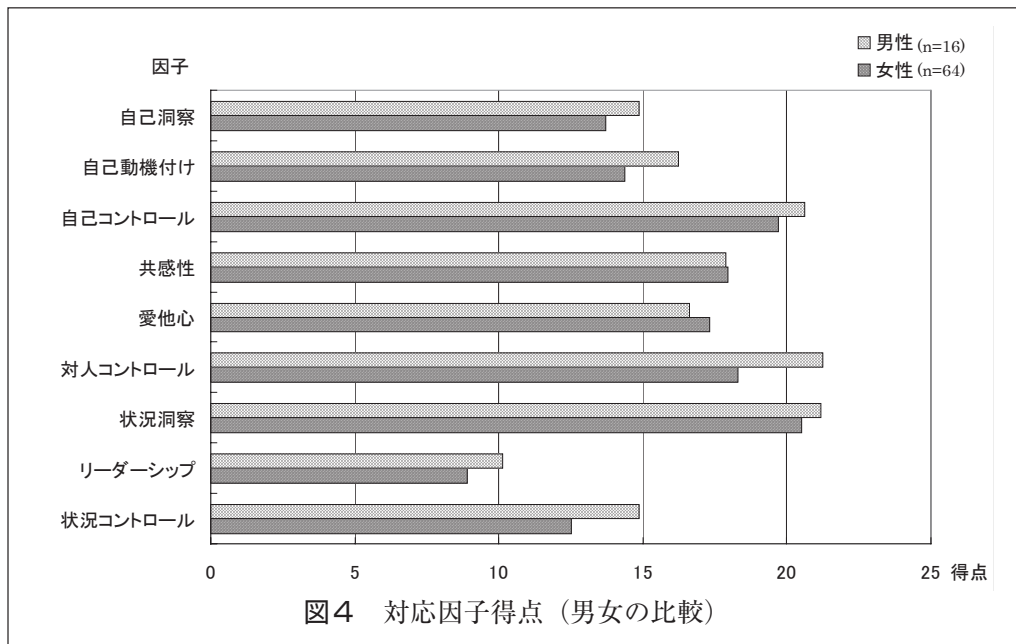
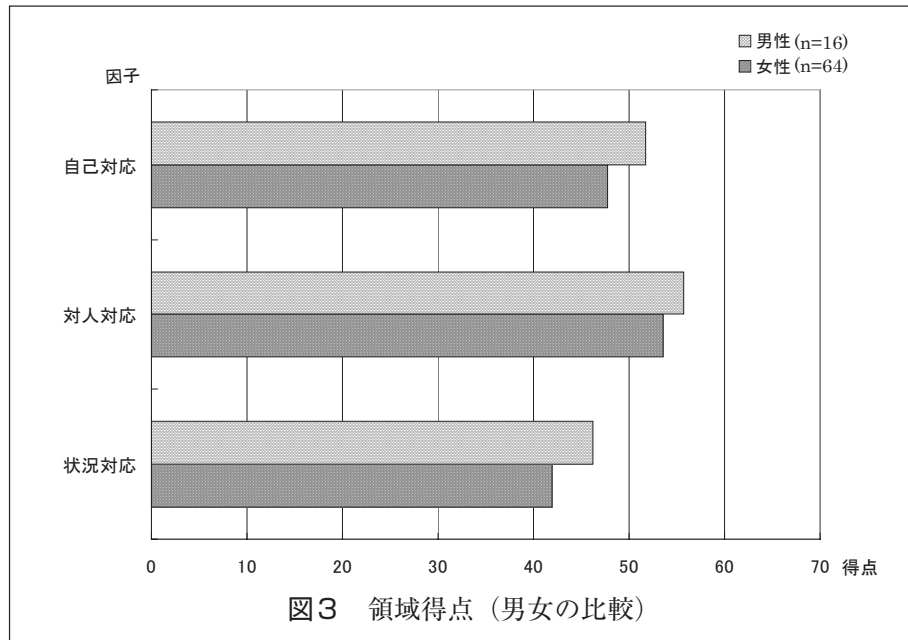
これらの結果から, 特定の因子得点について男性の方が女性よりも高いという特徴がみられた。

V. 考 察

1. 領域得点からみる対象者の特性

対人対応得点が最も高いということは, 今回の対象者の情動知能特性は, 社会接触を好む傾向や協調性が高く, 対人関係を適切に維持することができる能力が高いと言える。看護学生が一般女子学生に比べ, 外向性が高く神経症的傾

看護学科における男女学生の情動知能特性の検討



向が低い集団であるという山本らの報告（山本ら，1998）と類似している。また，医療職の中でも看護職は，患者や他の医療従事者とのコミュニケーションが重要視される職種であり，対人関係を円滑にできなければ勤まらない職種である（近村ら，2007）。したがって，対人対応得点が高いということは，看護師に求められる資質として望ましい結果であると考えられる。

一方で，比較的，低値を示した項目に，対応因子「リーダーシップ」がある。「リーダーシップ」はコミュニケーションやモラル，問題解決過程と同様に看護管理を実践する上で基本的

な知識技術（原田，2001）である。看護師は，看護活動の様々な場で医療・看護チームのリーダーやチーム員として行動する。チームで活動するためには，職階に拘わらず相互にチームリーダーになる必要があるため，全ての看護師にリーダーシップは求められる。リーダーシップの能力の修得に際しては生得的な気質に拘わらず，経験と学習によって，向上させていく必要がある。

2. 対象者の情動知能特性

社会人平均値では自己対応得点は対人対応得

点よりも高い（内山ら，2001）が，本研究では，自己対応得点よりも対人対応得点の方が高かった。特に，「共感性」，「愛他心」，「対人コントロール」の得点が高いという結果，および，下位因子である「喜びの共感」，「悩みの共感」，「配慮」，「自発的援助」，「人づきあい」，「協力」，「気配り」の項目の得点が高いことから，今回の対象者の情動知能特性傾向として，自分自身と積極的に向き合い，自己の心のはたらきを察知するよりも，社会接触を好み他者に好意的に関心を寄せていると考えられる。つまり，「自己」よりも「他者」により関心を抱いていることがわかる。

エリクソンが提唱するように，青年期は自我同一性（アイデンティティ）の確立が重要性を帯びてくる（柏尾，2009）が，時には，自我同一性が獲得できず，自分の生き方について迷い苦しむこともある。したがって，自己対応得点については，青年期に区分される大学生と比べて社会人の方が高くなることが予測されるが，本研究の対象者の自己対応得点は，社会人平均値よりも高かった。これは，一般の大学生に比べて，卒業後の進路が明確であるというのも一因であると考えられる。

ただ，看護職に就いてからの職務継続意志は個人要因が関係していると指摘されており（羽田野ら，2003），自尊感情が高い看護師は就業を継続し，一方で自尊感情の低い看護師は退職していくこと（渡邊ら，2010；福田ら，2001），自己実現の高さが職務継続に影響すること（中村ら，2001）からも，将来的には臨床現場において，自分自身と向き合い，自らの存在価値をさらに高めていけるための学びが重要だと考えられる。

看護職などの対人援助職者には，自分の感情を管理して，その場にふさわしい感情を喚起させるような自己管理が求められる（佐藤，2010）。それゆえ，社会人平均値と比べ，ほぼ全ての項目で得点が高いことは望ましいといえる。しかしながら，佐藤（2010）が指摘しているように，感情管理に失敗するとこれが強いストレス負荷となりバーンアウトに陥ることが少なからずあるため，自己効力を高めるアサーショントレーニングにより，さらに情動知能を

上げていく関わりが大事だと思われる。

3. 性差の検討

EQSの合計得点は男性の方が女性よりも高いことが示されている。また，領域別の得点では，自己対応得点と状況対応得点は男性の方が高く，一方，対人対応得点は女性の方が高いことが示されている（内山ら，2001）。

本研究結果については，領域別の得点に有意差は認められなかったものの，社会人標本と同様，男性の方が女性よりも得点が高い傾向にあった。しかし，対人対応得点については女性の方が高いという結果（内山ら，2001）と異なるものであった。これは，看護学生は，看護以外の専攻の学生に比べ，対人対応得点が高いという結果（宇津木，2006；橋本・宇津木，2010）を支持するものであった。

顕著に性差（男性>女性）がみられたのは対人対応得点の下位因子である「人づきあい」と，状況対応得点の下位因子である「適応性」の得点であった。この「人づきあい」の能力は，自己の感情を他者から適切に防衛することができるということである。また，「適応性」は自己を変えていく力である（内山ら，2001）。したがって，これらの能力を備えているということは，困難な状況でも自身を守りながら柔軟に対処できることを意味し，看護職を志す者としての望ましい特徴だと評価できる。

4. 本研究の限界と課題

今回は，対象者全体の情動知能特性を把握するため，主に社会人平均値との比較を行った。しかし，本研究の調査対象者は青年期にある大学生であり，自己概念の確立した成人期にある社会人とは異なる面をもつと思われる。したがって，本研究結果を一般化するためには，今後は，他の看護系大学の学生，看護以外の専攻の学生と同様の調査を実施し，比較検討することが必要だと考える。特に，本研究は男子学生の調査対象者数が少なかったため，今後は男子学生の対象者を増やす必要がある。

また，年齢を重ねると，自己や他者に対する適応能力が養われる可能性がある（内山ら，2001）ことから，同一対象の経年的変化を追っ

た縦断的研究が必要だと思われる。

VI. 結 論

本研究では、情動知能尺度EQS（エクス）を用いて、看護学生全体の情動知能特性を調べた。その結果、対象者全体の情動知能特性として対人対応得点が高いという結果が得られた。また、性差の検討を行ったところ、「人づきあい」、「適応性」について男性の方が女性よりも得点が高いことが明らかになった。男性の対人対応得点が高かったことは、看護職を志す上で望ましい特徴であり、重要な知見であるといえる。

謝 辞

本研究の実施にあたりまして、研究の趣旨をご理解頂き、快く質問紙にご協力して頂いたS大学短期大学部看護学科の学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 荒川直子 (2007) : 母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難, 日本看護学会論文集: 看護教育, 38号, 123-125.
- 近村千穂, 小林敏生, 石崎文子, 青井聡美, 飯田忠行, 山岸まなほ, 片岡健 (2007) : 看護臨床実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連, 広島大学保健学ジャーナル, 7 (1), 15-22.
- 福田春枝, 荒川千秋, 吉田亨, 佐々木かほる, 斉藤基, 行木真由美, 木暮総子, 小野道子, 小林秀代, 星野悦子, 正田美智子 (2001) : 看護婦・士の自尊感情についての調査-経験年数, 年齢, 仕事満足度, 就業意向との関連-, 群馬保健学紀要, 22, 11-16.
- 柏尾眞津子 (2009) : 発達・社会からみる人間関係-現代に生きる青年のために-, 32-53, 北大路書房, 京都.
- 中村洋子, 野崎佐由美 (2001) : 看護師の仕事の職務継続意志と満足度に関する要因の分析, 看護, 53 (8), 81-91.

- 原田広枝 (2001) : 看護基礎教育におけるリーダーシップ論の教授内容の一考察-テキストから見たリーダーシップ論の内容と位置づけ-, 教育経営学研究紀要, 5, 135-143.
- 橋本由里, 宇津木成介 (2010) : 看護学生のEQS得点の傾向, 日本心理学会第74回大会発表論文集, 956.
- 羽田野花美, 酒井淳子, 矢野紀子, 澤田忠幸 (2003) : 女性看護師の職務満足度と職業継続意志および特性的自己効力感との関連, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 16号, 1-8.
- 林智子, 河合優年 (2001) : 看護学生の共感性の発達と他者評価との関連-精神看護学実習前後変化からの検討-, 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 424.
- Mayer, J.D., & Salovey, P. (1997) : What is emotional intelligence? In Salovey, P., & Sluyter, D. (Eds.), Emotional development and emotional intelligence : Educational implications. New York : Basic Books.
- 三宅順, 近藤大貴, 奥山真由美 (2010) : 男子看護学生に特有の臨地実習におけるストレスと対処行動, 日本看護学会論文集: 看護教育, 40号, 30-32.
- 佐藤安子 (2010) : 対人援助職におけるストレス認知とレジリエンス-対人援助職と大学生の比較-, 日本心理学会第74回大会発表論文集, 65.
- 内山喜久雄, 島井哲志, 宇津木成介, 大竹恵子 (2001) : EQSマニュアル, 41, 実務教育出版, 東京.
- 宇津木成介 (2006) : ポジティブ心理学, 99-113, ナカニシヤ出版, 東京.
- 山本有紀, 服部卓, 宮沢君子 (1998) : 看護学生のストレスに関して, 群馬保健学紀要, 19, 77-80.
- 渡邊里香, 荒木田美香子, 鈴木純恵 (2010) : 若手看護師の離職意向に関連する個人要因と組織要因の検討 1年目と5年目の比較, 日本看護科学会誌, 30 (1), 52-61.

A comparison of emotional intelligence traits between male and female students in Nursing College.

Yuka HIRAI and Yuri HASHIMOTO

Abstract : Emotional intelligence plays a significant role in nursing. However, not many studies were done to compare emotional intelligence between male nurse students and female nurse students. In this study we examined gender differences of emotional intelligence of nursing students.

Eighty students in a nursing college (16 male and 64 female students) answered a questionnaire developed to measure emotional intelligence that estimates traits and behavioral tendency among three domains; intrapersonal, interpersonal, and situational. The result showed that almost all the scale scores were higher than the average obtained from the large adult sample. On the other hand, the score of "Leadership" in situational domain was almost the same as the large adult sample. Gender differences were observed in "Sociability" and "Adaptability" and the scores were significantly higher in male students than in female students. The knowledge of gender differences will be helpful in teaching nursing students.

Key Words and Phrases : emotional intelligence, EQS, nursing students, male students, gender differences